

[04\_10] 図書館情報 : 九州大学附属図書館月報 :  
4(10)

<https://doi.org/10.15017/18016>

---

出版情報 : 図書館情報. 4 (10), pp.51-56, 1968-10-25. 九州大学附属図書館  
バージョン :  
権利関係 :

## 私蔵本「元版宋史 卷一八三」

日野開三郎

中国は易姓革命の国といわれる。その長い歴史が夥しい王朝の興亡で綴られているという意味である。革命によって生れた新王朝は必ず前王朝の歴史を編輯するのが慣例となっていた。ところが蒙古人の建てた元王朝はその滅した金国や宋国の歴史を編輯しようとしなかった。それは、元は永遠に続くべき国家であるから前王朝の歴史編輯を急ぐ要はないと考えたからである。ところが順帝の時、漢人臣僚の熱心な勧めで編輯を思い立ち、至正十五年（1355）に宋史ができた。皮肉にもそれから十三年目に大元帝国は滅んでいる。従って元版宋史は宋史の初版本と考えて差支えない。百納本の宋史はこの元版を影印したものであるという。たまたま元版宋史の一八三巻が一冊私の手に入ったので、百納本の同巻と対比して見たところ、字体が相違っていて明らかに同じ版ではない。私蔵本は一枚（二頁）ごとに写字者・印刻者及び文字数が行外に記入せられていて、写字・印刻の責任者を明示すると共に、字数による労賃の計算も容易なようになっている。写字者の名は「勞辛」一人であるが、印刻職人の名は嚴正・李京など合計十二人にも達している。ところが百納本の同巻には字数の記入がなく、人名は林茂・孟宗曾・任徳章のわずか三名がところどころに記されているだけであり、且つ、林茂は或は写字者とあったり、或は刊刻者とあったり、他の二名にはその何れであるとも説明がない。私蔵本は百納本元版より確に丹念なでき栄えである。亡国直前にできた同じ元版の宋史に全く版刻の違うものがあったことになる。

私は東洋史家でありながら、書誌学には余り興味がないが、筆生・印刻職人の氏名を記入して責任を明らかにすると共に賃金請求権の所在をも明らかにし、字数を記入して各人の受取る賃金額が一目瞭然する仕組みになっていることには非常に興味を惹かれたので、筆を執った次第である。版本に就いての書誌学的研究はどなたかに御教示を乞う。

（ひの・かいざぶろう：文学部教授；東洋史学）

## 第42次国立七大学附属図書館協議会

第40次国立七大学附属図書館協議会は、9月28日から10月1日まで4日間、東京大学附属図書館の当番で東京大学下賀茂寮で開催された。文部省側からは立松情報図書館課長ほか係官1名、各大学附属図書館長および事務部課長ら22名が出席した。

今年から協議会に先立って、9月28、29日の2日間は、部課長会議が開催された。この会議の在り方から始まり、大学図書館が当面する問題点について、自由討議の方式で協議し、文部省側からも大学図書館の振興について当局の方針の説明があり、懇談が重ねられた。

協議会は、慣例により当番館の伊藤館長が議長をつとめられた。協議事項としては、(1)人事交流について (2)図書館職員の教育について (3)相互協力について：テレックス、資料の貸借、コピー業務、印刷カード等の問題 (4)学術情報のネットワークについて：昭和39年日本学術会議の政府に対する勧告〈大学における図書館の近代化〉について終始熱心な討議が行なわれた。

なかでも最も重要な問題として意見の一致をみたのは、日本学術会議の「大学図書館の近代化」に関する勧告の一環であり、大学図書館の近代化をめざして、(1)参考図書費の予算化 (2)特別図書購入費の継続 (3)総合目録作成費の予算化 (4)事務機構の整備等の項目について要望することが決定された。以上の協議に関連して、立松課長から昭和44年度の文部省予算要求事項について説明が行なわれた。

## 全国図書館大会・大学図書館部会

昭和43年度の大会は、9月5日から7日までの3日間、札幌市において開催、現在の図書館界の当面する諸問題を中心に、14部会にわかれて、それぞれ研究発表、報告、討議がつづけられた。ここでは、大学図書館部会（第7部会）の討議経過について述べる。

大学図書館部会における問題は、①図書館活動の基盤となる図書専門職員養成について、②図書館の相互協力、とくに、国際的観点からの大学図書館または研究図書館との協力体制確立について——以上の2点に集約されたようである。とくに、昨年度にひきつづき、本大会にアメリカ図書館協会(ALA)の代表として公式参加した、前ALA会長F. E. モアハルト氏(Foster Edward Mohrhardt)とミシガン大学アジア図書館長・鈴木幸久氏が、形だけの参加ではなく、講演を通じ、上記の2点について、具体的にまた積極的に討議に加わったことは、今後のわが国における大学図書館活動の方向付けに大きな示唆をあたえたものといえる。以下、部会における発表、講演などについて簡単に紹介する。

**発表** (1) 前島重方氏：専門職の問題について（日米図書館学教科課程と大学図書館専門職員のあり方についての検討）、(2) 田辺広氏：日米の大学図書館を比較して（L. C. を中心とした集中目録作業とアメリカ大学図書館の協力、また、現在アメリカにおいて法制化、実行に移されている\*NPAC〈National Programm for Acquisition and Cataloging—収書および目録のための国家計画—〉についての解説、および、国立国会図書館印刷カードのあり方）、(3) 原田隆吉氏：アメリカの大学図書館について（人的、物的、機能的、思想的背景、管理面などからの大学図書館の検討）。

**講演** (1) モアハルト氏：大学図書館と研究図書館——アメリカ研究図書館協会——（情報資料の激増による現在の大学図書館と研究図書館全般の問題を、専門職員、整理業務、情報提供およびオートメーション化などの面からとりあげ、その解決策として、大学および研究図書館の協力体制確立の必要性を強調、(2) 鈴木幸久氏：大学図書館の協力体制、日本側から要望があれば、ALAは喜んで援助、協力に応ずる用意があること、また、専門職(Professional Librarian)の問題は、現在アメリカにおいても再検討されていることを、CRL(College and Research Libraries)の最近4、5年間に掲載された文献をあげて説明。

**報告** 伊藤東大附属図書館長から、日米大学図書館会議は、44年5月13日から16日までの4日間開催に内定した旨報告された。

以上のほか、国立国会図書館酒井連絡部長から、国立国会図書館の交換業務について——大学

図書館の相互協力に関連して—と、松本久男氏から L. C. シャド・キャタログ (Shared Catalog) 東京事務所開設について連絡があった。

おわりに、全体会議において、大学図書館に関係ある要望事項として、(1)図書館短期大学の4年制大学への昇格(図書館学教育部会提出)と、(2)わが国における印刷カードの普及と改善、および、その将来性について審議するため、国立国会図書館、文部省、大学及び公共図書館並びに日本図書館協会、出版界代表者からなる専門協議会の常置(整理技術部会提出)を、関係方面に要望することを、また、44年度の大会開催地を長野市に決定した。

\* NPAC については、東京大学附属図書館、「図書館の窓」Vol. 7, No. 7, 1968 所載<Title II. C-NAPAC>を参照。

## ◆ 研 修

### 福岡県大学図書館協議会福岡地区研究会(第2回)

<とき: 昭和43年9月18日 ところ: 九州大学教養部第3会議室>

参加者: 11館28名(特別参加: サンパウロ大学附属図書館)

今回は本学教養部英語科・林哲郎教授の講演「英国初期の印刷・出版事情について」のあと続いて研究課題①「分類表の検討」に入り、UDCの使用について、九州芸術工科大学図書館・永芳弘武掛長から発表があった。なお、今回は「分類表の検討」のうち NLM 分類表について、本学医学部分館から発表される予定である。

### 第3回医学図書館員研究集会西日本集会(日本医学図書館協会主催、文部省後援)

<とき: 昭和43年9月25日—27日 ところ: 長崎大学附属図書館医学部分館>

この研究集会は、医学図書館員教育の一環として、日常業務の実際的な面に重点をおいたものとして構想し、昭和41年から3カ年計画で九州地区(名古屋以西を対象)と東北地区(東京以東を対象)に分かれてすすめられてきたもので、今回はその最終回に当たる。基本テーマは「管理の合理化とサービス機能の向上」であり、内容は(1)医学図書館における文献情報サービスの動向(2)総合大学における図書館機能に占める医学図書館の位置ならびにその機能(3)実例を中心とした医学文献探索の方法(演習を含む)(4)経営分析的方法と図書館運営(5)医学図書館における図書目録の形態について、などであった。講師は佐藤謙助(長崎大学医学部分館長)、津田良成(慶応大学医学図書館総務部長)はじめ7名、受講者は東京、岐阜、愛知、京都、奈良、大阪、徳島、鳥取、山口など、九州地区以外の参加者を加え25名で、実のある研究会となった。なお、昭和44年以降の医学図書館員教育計画については、第39回日本医学図書館協会総会(当番館: 東京慈恵会医科大学 会期: 11月7日—9日)で審議決定される筈である。

## 調査報告

### 指定図書の利用分析について —中央図書館—

指定図書の利用分析を行う前に、まず指定図書室の管理方法を説明しておく必要がある。指定図書室はオープン・システムになっていて、利用者は書架の図書を自由に手にとって読書できるが、読んだ図書は自分で書架へ収めず、必ずその部屋の係員へ渡すようになっている。係員はその都度、その図書の裏表紙に貼ってあるデータスリップに日付印を押し、利用の記録をとっておく。

次の表1は、そのデータスリップをもとに利用状況を調査し、利用回数の多い順に書目を作成した。利用者が、読んだ図書を必ず係員のところへ持ってくるとは限らないので、この利用回数は実際の回数をはるかに下廻っている。しかし絶えず学生にその制度の実行をよびかけているので、かなり正確な数字に近いものは出ているものと思う。

人文科学系の図書に比して、自然科学系の図書が断然利用度が高いのは、理科学系学科が比較的基本図書の選定が容易なのに較べて広範囲の図書を必要とする文科系は、限られた予算内での基本図書の選定がむずかしいことを示している。指定図書室を利用している学生数も、理科学系が勝っている。理科学系学部が質量共に指定図書制度を活用していることになる。

表 1 (昭和42年度)

書名	著者	出版社	教室名	利用回数
固体物理学入門	C. Kittel	丸善	電子工学 第4	185
電気計測工学	平井平八郎	オーム社	電子工学 第4	111
有機化学実験書	L. ガッターマン	共立出版	有機化学, 応用化学第4	110
量子力学	シツ彦	吉岡書店	物理学 第1	80
自動制御の理論と演習	市川邦彦	産業図書	航空 第5	79
固体物理学	A. J. Pekker	コロナ社	電気工学 第3	74
電気機器 第1	広瀬敬一	オーム社	電気 第1~4	73
電熱学・統計力学	久保亮一	裳華房	物理第3, 応用物理学・力学第2	69
気体物理学概論	堀井武夫	コロナ社	電気 第2	67
固体物理学	永宮健夫	岩波書店	物理 第7	65
半導体電子工学	柳井久義	コロナ社	電子 第1	65
量子力学 第1	朝永振一郎	みすず書房	化学, 物理 第1	63
力学	山内恭彦	裳華房	応用, 力学 第2	63
統計物理学 上巻	ランダウ・リフシッツ	岩波書店	物理 第3	61
高分子化学 教程	井本稔	朝倉書店	応用化学 第5	58
伝熱概論	甲藤好郎	養賢堂	機械 第4	57
自動制御理論	高井宏幸	オーム社	電気 第1~4	57
機械力学	津田公一	山海堂	機械 第1	56
機械力学	亘野厚	共立出版	機械 第1	54
電気磁気測定	須山正敏	コロナ社	通信工学	50
結晶物理学	有山兼	共立出版	物理 第7	49
生物化学	A. ホワイト	広川書店	化学・生物	48
電子工学基礎実験	関口利男	コロナ社	通信 第2	48
量子力学	ディラック	岩波書店	物理 第5, 電気 第3	47
力学	原島鮮	裳華房	応用物理学 第2	46
自動制御理論	和田弘	共立出版	航空 第5	44
電気機器 第1巻	電気学会通信教育会	電気学会	電気 第2	44
有機化学反応論	小方芳郎	丸善	有機化学第2, 応用化学第4	41
電子回路 第1	池上淳一	オーム社	電気 第1~4	40
トランジスタ	電気学会通信教育会	電気学会	電気 第1~4	40
照明工学	電気学会通信教育会	電気学会	電気 第1~4	39
有機化学 第1	D. J. Cram	広川書店	応用化学 第4	39
核化学	大沢省三	広川書店	農学 第1	39
生物化学 教程	P. カールソン	朝倉書店	化学第6, 農芸・生物化学	39
物質の磁性	有山兼孝	共立出版	物理 第7	38
物理化学 上	W. J. Moore	東京化学同人	生物化学, 応用化学第3, 化学機械第1	38
鉄鋼の顕微鏡写真と解説	佐藤和雄	丸善	機械(構造第2)	38
機械力学	谷口修	裳華房	農業工学, 農業機械学	37
電気材料	電気学会通信教育会	電気学会	電気 第1~4	36
固体物性	M. J. Sinnott	丸善	電気 第2	36
放射線計測学	三浦功	裳華房	物理 第5	36
電気磁気学	舟橋憲治	東京電気大学出版部	電気 第1	36
応用力学演習 上	杉本礼三	森北出版	農業工学第2, 造船第1	35
固体物性論の基礎	J. M. Ziman	丸善	電子 第5	35
有機化学 上	R. Q. Brewster	東京化学同人	合成化学 第4	35
原子核物理学	フェルミ	吉岡書店	物理 第1	34
量子力学	小谷正雄	裳華房	電気第2, 物理第1	34
核酸の生化学	J. N. デビッドソン	共立出版	農芸化学・蚕糸	34
初等函数論演習	能代清	培風館	電気 第3	33
量子力学	荒木源太郎	培風館	力学 第2	33
有機化学 下	R. Q. Brewster	東京化学同人	合成化学 第4	33
電子計算機 第2	平山博	コロナ社	電子	33
法学 教室	有斐閣	有斐閣	刑法 第1	32
X線結晶学 上巻	仁田勇	丸善	物理第7, 鉄鋼冶金第4	32
材料力学要論	S. Timoshenko	コロナ社	土木 第4	32
流体分子力学	原田幸夫	槇書店	航空 第4	32
高分子の構造と物性 上	P. J. フローリー	丸善	化学第4, 合成化学第4	32
高分子の構造と物性 下	植松市太郎	丸善	化学第4, 応用化学第2	32
分子分析化学 第1	鎌田仁	コロナ社	工業分析	32
応用力学演習 下巻	杉本礼三	森北出版	農業工学第2, 造船第1	31
熱学統計力学	原島鮮	培風館	化学第4, 物理	31
計解日本国憲法 上	原学協会	有斐閣	憲法・行政法	30
量子力学 第2	朝永振一郎	みすず書房	物理第1, 電気第3	30

なお、次の表2は、学部別に見た指定図書の利用交流を示すものである。たとえば、基礎学科の理学部の指定図書を、工、農学部の学生が頻繁に利用していることがわかる。中央図書館に各学部の指定図書を集中管理している現状の、意外に大きな利点であろう。

表2 学部間の利用交流状況 (昭和42年度)

	文	教育	法	経	理	工	農	計
文 開架冊数(1,389)		359	35	25	3	8	11	441
” 教育 (555)	21		6					27
” 法 (838)	33	19		20	3		5	80
” 経済 (1,004)	30	6	14		12	3	29	94
” 理 (1,105)	49	38	7	19		552	199	864
” 工 (2,630)	37	17	6	5	1,502		416	1,983
” 農 (1,139)	24	5	1	25	248	74		377

(示例) 1. 文学部の学生は、教育学部の指定図書を359回利用した。

2. 教育学部の学生は、文学部の指定図書を21回利用した。

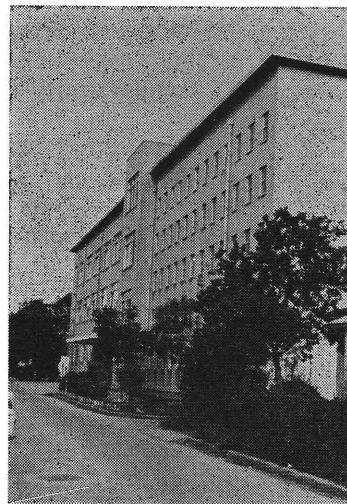
## 学内図書館めぐり

### 医学部図書館の沿革(最終回)一分館時代

○倉恒分館長時代(39年4月—43年3月)一倉恒教授(公衆衛生学)は3代目の分館長として、4年間(2期)意欲的な姿勢の中で責務を果され、殊にわが医学図書館10年の歩みの中で、現状に対する自己反省からきめ細かい分析と、さらにつづく問題として学術雑誌の中央化実現への努力をかさねて、すぐれた業績を残された。

1. 39年9月:全館オープンシステムへの発足。新分館長を迎えてから、いわゆる図書館の近代化をテーマとしたトピックや討論が積み重ねられていた。Floor Planの改善案も当面する課題の一つだった。最善案に対する具体策まで考慮されたのであるが、結局次善の策として、全館オープンシステムにふみきるため、一階の改装工事、雑誌書架の増加およびロッカー設備などに要する特別予算が承認された。夏休中に改装工事、その他が整備され、9月の学期始めから全国国立大学では、異色の全館オープンシステムが実現した。このために館内の利用配置は次のように変更した。

- (1) 単行本(従来は学生用として2階)は3階閲覧室へ。和洋書(1955年)2000冊のN. L. M.分類による配架。
- (2) 新刊雑誌(従来は教官用として3階)は2階閲覧室へ。カレントジャーナル(洋300,和200タイトル)の外、利用度の高い主要雑誌(和洋計150タイトル)のバック10年分の配架。
- (3) 索引,抄録類(従来3階303号室)は2階閲覧室(レファレンスコーナー)へ。
- (4) 新聞(従来1階)は3階休憩室(308号)へ 註:308号室は従来邦文索引室であった。
- (5) 入館受付,貸出返却,複写申込など(従来2階)は1階へ。閲覧貸出証(又は学生証)提出後の鞆類は新設のロッカーへ。
- (6) 単行本の目録カード(従来2階閲覧室)は2~3階段の踊り場へ。(このため踊り場の鉄柵をとりはずした。)
- (7) 件名目録の新設。NLMのMedical Subject Headingsを使って単行書の件名目録を作ることにした。和書についてはMe SHを翻訳して適用した。なお、この件名目録の採用により、従来のNDCによる分類目録は廃止された。



医学図書館の全景

(8) 分類の変更。N. D. C. から N. L. M. へ。ただし1955年以降のものに限り、それ以前は N. D. C. 分類のまま書庫に残した。

2. 40年5月：利用アンケート集計報告。昨年9月全国でも異例の全体オープンシステムに脱皮したが果して、それだけで問題点は解消したであろうか、今後図書館機能の向上と運営の参考のため、利用アンケートがこころみられた。実施時期、2月10日～3月20日、内容は研究者と学生の2部に分けられ、タイプ印刷37頁にまとめられた。

3. 40年8月：貸出方法の改善。オープンシステムのため利用者が借用図書を1階カウンターまで直接持参することに变りはないが、従来の閲覧貸出証（入館券と貸出記録をかねて各人一冊）を新しく入館券（各人一枚）と貸出券（学生3枚、教職員5枚、講師以上10枚）に切替えた。改善の眼目となった貸出券（一枚1冊の利用）の使用を判り易く示せば次の通りである。

旧：1. 申込用紙（利用者記入） 2. ブックカード（同） 3. 閲覧貸出証（係員記入）  
新：1. 貸出券（身分、記名済） 2. ブックカード（記名不要）

註：未製本雑誌に限り、ブックカードに誌名、巻号年の記入の要あり。

上記のような新方式により、未製本雑誌を除き、煩瑣な記入手続がなくてすむようになった。

4. 41年3月：分館長の改選。倉恒分館長の再選が決定した。

5. 41年4月：図書館白書の完成。倉恒分館長の指示により着手された。内容的には医学部図書館行政に関する白書ともいふべきものであった。建設以来約10年を経過した、医学部分館の機能に対する、いわば自己批判であり、客観的な分析資料による問題点の把握、改善へのあしがかりをつかむことが主な目的だった。したがってこれはわが分館の今後の動向を決定する有力な示唆ともなった。ちなみに、この図書館白書は、この年の秋、日本医学図書館協会の総会（札幌大）において40年度小沼医学図書館賞（一席）を受賞した。

6. 41年8月：第1回医学図書館員研究集会西日本集会の開催。この研究集会については、本誌2巻6号および同9号で紹介済みである。

7. 41年12月：学術雑誌中央化への歩み。これまでも当学部における図書館行政の基本的理念であった中央化の問題は、たびたび論じられていたわけであるが、具体的にそれがとりあげられ、前進をはじめたのは、前記白書の問題点の検討（12月9日：図書委員会）からである。まず手始めに学術雑誌の中央化が実施（43年2月）の段階に至るまでの経過を順次示せば次の通りである。

(1) 42年1月13日：図書主任会議にかけ、協力を求め、「購入雑誌などに関するアンケート」の実施資料を中央化の参考とした。

(2) 同3月16日：図書委員会議でいくつかの中央化方式案の審議。

(3) 同5月30日：図書委員会議で前記方式案のうち教室が希望する雑誌のみの中央化するという案の決定。

(4) 同6月7日：教授会で前記方式案の審議。

(5) 同年6月13日：図書主任連絡会議における中央化の希望雑誌調査の提起。

(6) 同年6月30日：図書委員会による前記の調査結果の検討。

(7) 同年7月5日：教授会における学術雑誌中央化方式案の決定。

(8) 同年8月8日：前記決定にもとづいた、教室希望調査の結果の各図書主任宛への通知。

(9) 同年11月24日：図書委員会で希望雑誌購入（種類、部数）の決定。

註：以上については、本誌2巻7号(p. 41)同11号(p. 66)および3巻9号(p. 51)に詳しく紹介されている。

(10) 43年2月：学術雑誌の中央化による移管がこの月の中旬から始まった。なお、完了は次年度中にわたるが、運搬と整理の段階で、実際的には多少の変更は余儀ないものがある。なお当初計画で中央化する雑誌総数は次の通りである。

総数	226種	278部	6,404冊
内国雑誌	81	122	2,907
外国雑誌	145	156	3,497

(11) 43年2月28日：学術雑誌の中央化による間隙を補うものとして従来の Current contents サービスの外に同誌に未掲載の欧文雑誌 176、和雑誌 109タイトルを新にサービスの対象に加えた。

かくしてここに、わが医学図書館は、建設当初の基本的理念であった中央化への前進をはじめたのである。